私がなぜ現在の科目を選んだか

「消化器外科」

信州大学医学部附属病院消化器外科
飯　沼　伸　佳

アカデミズムに少しコンプレックスのある自分は，信州医誌を手に取ると，前半のページを後回しにして，まずこの肌色のページを開いて，先輩や後輩，同期生の名前を探すことから始めています。“decade”と言う表現は，この状況では『十年一昔』に当てはまるのでしょうか？ 自分も医師として社会に出て，数えで10歳です。実年齢もいにしえの賢人が而立した歳を数年越えました。せめて家ぐらいはたててみたいと思いつつ，何時になったら惑わなくなるのかと考えさせられます。

枕はここまでとして，本題に入りますが，自分の場合，表題について『なぜ選んだのか』なのか『なぜ選んでいるのか』なのか，『それが問題だ』と言うべきなのかも知れません。当初，『面白きこともなき世を面白く住みなすものは心なりけり』と申しますか，『アワブクのような，それも綺麗なアワブクでなく，風呂の中の屁に似て，後ろに回って消えて行く』様な気分と申しますか，そんな確固たる意志もなく決めたように思います。いや，そうです，決めました。度し難い自分は，今もそうかも知れません。そんな自分を繋ぎ止めてくれているのは，授けてもらった『矜持』なのでしょうか？ しみ込んだ『気っ風』なのでしょうか？ それとも『今までの経験』から生じる託付なのでしょうか？ いずれにしろ，この道程はまさしく選択されて出来たもので，『わけいっても　わけいっても　青い山』　僕の前に道はないことに変わらない気がします。好き放題，書いてしまいました。綸言汗のごとし，自分の場合，綸言と称される身の程ではありませんが，実際にこの文章が印字されると，汗は出てきそうです。

話は変わりますが，この文章は年明けに発行されると伺いました。日馬富士（安馬）が横綱になれるかも重要ですが，浅田真央ちゃんも気がかりです。もっと気がかりなのは，年末ジャンボはどうなったかです。

手に取るな　やはり野に置け　蓮華草

（信大平11年卒）

私がなぜ現在の科目を選んだか

「眼　科」

信州大学医学部眼科学講座
今　井　　章

平成18年に大学を卒業後，信州大学および関連病院での初期臨床研修を終了後，平成20年度より信州大学眼科にて後期研修を始めさせていただきました。父の影響もあり学生時代から眼科に興味はありました。最終的に眼科に入局を決めたのは初期臨床研修中の選択期間中でした。私の思う眼科の魅力についてですが，本来透明な臓器である光学系の診察所見は，ほとんどの所見を観察することで得られます。眼科に来て最初は何も見えなかった所見が，細隙灯顕微鏡や検眼鏡で，今何が起こっているのかを観察し，とらえることができるようになることはとても楽しく感じ，また見える，ということの大切さを実感し，また，内科系と外科系いずれの顔も持ち合わせている科であり，診断から治療まで一貫して診療できる科であることも魅力的でしたが，何よりの魅力は手術によって患者さんが見えるようになることであると思います。人間は日常生活をおくる上で必要とする情報の90％以上を視覚に頼っていると言われています。視覚に障害を持つということはまさに生活そのものの問題に直面するということです。そんな，生活そのものの質に関わることのできる科であることを研修中に実感したことが決めてでした。白内障の手術が終わったあとの患者さんに会うことほど嬉しいことはありませんでした。白内障以外に問題のあるケースは別として，ほとんどの場合，翌日には視力が大幅に向上し，前日までは歩くことさえままならなかった患者さんがスタスタと診察室までやってきて「こんなに明るいなんて嘘みたいです」と言ってくれたときの嬉しさといったら。これからのさらに進むことが確定している超高齢社会の中で，生活の質に大きく関与するクオリティーオブビジョンに関与することはとてもやりがいのある科であると思います。まだ，入局して半年，できないこと，知らないことだらけですが，めげずに地道に前に進んでいこうと思っています。

（兵庫医大平18年卒）